



丸桁に垂木を一つひとつ手作業で差し込む。



整然と並ぶ垂木。間隔は垂木の背の寸法である背返し。



建物の要所に伝統工法が用いられている。大安寺はいつでも見学可能。



5月5日上棟式での一コマ。参加者が綱を引っ張り、棟上げを喜び合う。



上棟式に参加した地域住民。「こういう機会に生きて巡り会えてよかった。こんなに太い木は久しぶりに見た。完成を楽しみにしている」と話した。

大安寺（下林）本堂が 170年ぶりに改築

「地域の人が愛され、長く残るものであってほしい」と大安寺本堂の改築に込めた願いを窪田顕脩住職は力強く話した。下林地区を一望できる高台に佇む大安寺は、昨年から本堂解体が開始された。寺院の改築は何百年単位で取り行われる。以前建てられていた本堂は約170年前に建てられた。村上工務店の村上善浩代表は「大安寺本堂の特徴的な工法は二軒ふたのき。丸桁がまぎょうと呼ばれる一番外側の

桁の上に垂木たるきを載せ、桔木はねぎを吊ることで深い軒を作ることができる。バランスよく部材を組み合わせた、重い屋根を効率的に支えられる」と話す。社寺建築は「瓦」による荘厳で重厚感のある屋根が大きな特長。屋根を支える梁には粘り強い松の木を使っている。木組みの美しさや年を重ねて増す色の艶やかさも社寺建築の魅力。そして、継手は釘の錆による建物の劣化を防ぐため金物を使わず木を掛け合

う。また、木を複数組むことで、遊びが生まれて建物の免震にも繋がる。「天災などの影響で、20年以上前から改築の話があった。寺院の保存・修理には長い時間が掛かる。ここまで来るのにやっと思いだった」と住職は話す。4月から本格的に工事が始まり、中心となる柱が簷え立ってきた。これからは、緻密で細かな作業へ移る。5月5日には、上棟式が執り行われた。「支えてくれる地域の人たち

や大工さんの技術に感謝したい。これから建つ本堂には感謝と期待が込められている。昔の人たちが苦勞して残したものを、今度は私たちが残していく。時代とともに人は変わっていくけれど、思いは形として残る。今後も繋いでいきたい。特に地域の人たちには、大安寺本堂ができていく過程を間近で見てもらい、さまざまなお話を聞いてほしい」と住職は真っ直ぐ前を見据えた。

スイッチとうおん 特別版

古の歴史と共に 新時代へ

大安寺 東温市下林



ここには、歴史がある。
守っていくべきものがある。
見守ってくださる人に
感謝の気持ちを込めて。